

平岡英郎選手との一騎打ちを制した中村直樹選手(左)。平岡選手は決勝で敗れたもののシリーズチャンピオンを確定させた。



中村直樹シルビアが追走をキメてシリーズ2連勝!!

世界的にドリフト人気が高まる中、ドリフトマッスルから名称も新たに2018年からスタートしたJAF公認競技ドリフトキングダム。その最終戦であるRd.7が、11月3~4日に栃木県の日光サーキットで行われた。ドリフトキングダムは、ドリキン(ドリフトキング)こと土屋圭市氏とスーパーGT・GT500ドライバーの松田次生氏が審査員を務め、進入スピードと区間タイムを重視し、走りの美しさやダイナミックさを総合的に競うもの。JAF準国内競技となるプロクラスは、単走決勝とベスト16トーナメント(追走)で優勝者を決定する。

単走は30名が参戦。単走で2本走行し、2名

の審査員の得点と速度と区間タイムの加点の合計で競い合う。この単走では100点が3名も出るといふ、かなりレベルの高い戦いとなった。そんな中、単走で1位を獲得したのは、MADEFACE VL RX-7に乗る平岡英郎選手だ。1本目99.90、2本目には100.00を獲得し、進入速度も最速となる132km/hをマークした。2位を獲得したヒラノタイヤ環七チェイサーに乗る木口健治選手も、1本目の走りで100点を獲得。しかし2本目は99.75と1位を獲得した平岡選手1本目の99.90に僅かに及ばなかった。3位は1本目に99.10、2本目には100.00を獲得したN-STYLE 霸王シルビアに乗る中村直樹選手が入った。

単走の上位16名で行われる追走トーナメントは、シリーズチャンピオンの行方もベスト4終了までもつれ込む大混戦となった。

ベスト8の1組目は、平岡選手vs長瀬幸治選手。平岡選手先行での1本目、スタートからキレイな走りで魅せる平岡選手に対し、長瀬選手は痛恨のスタートミス。3ポイント差を付けられてしまう。長瀬選手先行の2本目、1コーナー進入から後追いの平岡選手は同時振りから車間距離を詰めた走りで相手を追い込んでいき、勝ち上がりを決めた。

2組目は、玉川艶哉選手vs川井謙太郎選手。1本目、先行する玉川選手は進入からラインが小さくなってしまい、川井選手に2ポイントのリードを許してしまう。2本目、後追いの玉川選手が車間距離を詰めていく見事な走りで1ポイント取り戻すも、1本目の得点差で川井選手

プロクラス単走 / 1.2区間タイムの加点もあり、ほぼパーフェクトなドリフトを見せた平岡選手が1位。3.2本目で99.75と、トップと僅か0.15差が悔やまれる木口健治選手は2位。4.99.10の1本目に対し、2本目で100.00を獲得して3位となった中村選手。





プロクラス追走／5.1本目でエンジnstールでとなが、2位入賞でシリーズチャンピオンを確定させた平岡選手。6.ベテラン・木口選手が3位。7.8.中村選手が見事1位で最終戦を有終の美で飾った。9.第7戦の入賞の皆さん。10.ポイントランキング表彰の皆さん。

の勝ちとなった。

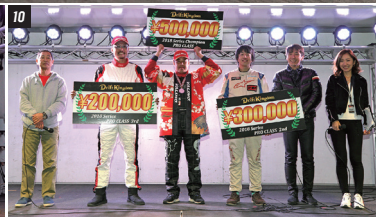
3組目は中村選手vs増田和之選手。1本目、2本目ともに中村選手らしい攻めの追走で、増田選手を4ポイント差で圧勝した。

4組目は今回3位以内に入ればシリーズチャンピオンが確定する益山航選手が、6年前にJAF公認となった初年度(当時はドリフトマッスル)シリーズチャンピオンの木口選手と対戦。シリーズランキング2番手の平岡選手と3番手の川井選手がベスト4入りを決めているだけに負けられない戦いとなった。益山選手先行の1本目、後追いの木口選手は益山選手をピッタリマークする形で1コーナーに進入。3～4コーナーでやや離されるシーンもあったが、とにかく1～2コーナーでの走りが評価され2ポイントを獲得。2本目、ポイントを取り返すべく後追いの益山選手も果敢に攻める。しかし気負い過ぎたか、ドリフトが戻りさらに4ポイント奪われて敗退となった。この時点で平岡選手のシリーズチャンピオンが決定した。

ベスト4は平岡選手と川井選手が対戦。シリーズチャンピオンを確定し、かなり楽になった平岡選手は、1本目の先行ではスピードを生かした走りで2ポイント獲得すると、2本目の後追いでも絶妙のアクセルワークで相手に詰め寄り2ポイントを追加し、優勝決定戦進出を果たす。

益山選手を破ってベスト4入りの木口選手は強敵・中村選手と対戦。先行の中村選手に同時振りからの1コーナーを見せるなど木口選手も食らいつく。2本目、ほぼ完璧に先行の走りをする木口選手に対し、後追いの中村選手は1コーナー進入からピッタリと接近する迫力あるドリフトを披露し、勝利した。

ファイナルとなる優勝決定戦。天才的なドリフトをみせる中村選手とシリーズチャンピオンを決めた平岡選手の対決。1本目の先行は平岡選手。しかしここで平岡選手がスタート直後の最終コーナーでエンジnstール。その後エンジンは復帰しそのまま走行するも、完全にリズムを崩し1～2コーナーで失速。大きなアドバンテージを中村選手に与えてしまう。2本目は両者ともに迫力あるドリフトを披露するも、勝負はRd.6に続き中村選手の勝利で終わった。2位は平岡選手、3位は3位決定戦で川井選手を破った木口選手が入った。



勝ちを狙える体制が作れた 平岡 英郎選手

「今年はRd.4の菅生とRd.5の富士で優勝し、まずまずの流れでシーズンを戦えていたので正直シリーズチャンピオンは狙っていました。FD3Sはグリップ走行のタイムアタックやレースでも今でも活躍するほどポテンシャルが高いマシンですし、そのポテンシャルの高さを生かした走りを心がけました。途中からタイヤをバリノに変更し、さらに勝ちを狙える体制にもっていったことも大きかったですね。これまでシリーズ2位は何度もありましたが、今回が自分にとって初めてのシリーズチャンピオンです。しかも初代ドリフトキングダムのシリーズチャンピオンに輝きました。応援してくれた方々、そしてチームのスタッフ、大会スタッフの皆様、本当にありがとうございました」



クラブマンクラスは花洲大樹選手が初優勝

11月4日にはクラブマンクラスが行われ、単走では後藤本樹選手(S14)が1位を獲得。ベスト16トーナメントは、花洲大樹選手(JZX100)が嬉しい初優勝を決め、2位には今回初参戦となる蕎麦切広大選手(HR31)が入った。3位は女性ドライバーの塚本奈々美選手(S14)が初入賞を果たし、初物づくしのラウンドとなった。なおクラブマンクラスのシリーズチャンピオンは、Rd.1とRd.2で優勝し、Rd.6で3位を獲得した金田ワグネルヒロミ選手(S15)が、Rd.6終了時点で獲得した。



11. 嬉しい初優勝を飾ったのは青のJZX100マーク2を駆る花洲大樹選手。12. 前戦はチャレンジエキスパートクラスで2位、今回はクラブマンクラスで2位となった蕎麦切広大選手。13. 塚本奈々美選手も初入賞の快挙。14. 第7戦の入賞の皆さん。15. 追走へ進出できなかったが、金田ワグネルヒロミ選手が2018シリーズのチャンピオンに輝いた